

乳児とのふれあい交流会にみる児童の意識調査

—性別と年少きょうだいの有無による違い—

A Study of Attitude of School-age Children Through a Program of Interaction with Infants
—Differences Between Sexes and Whether the Child has a Younger Sibling or Not—

山 口 香 織*・中 川 愛**

要 旨

小学6年生を対象に乳児とのふれあい交流会を実施し、交流学習の前後で児童の乳児に対する意識がどのように変化したのかを性差と年少きょうだいの有無との関連から検討した。その結果、対児感情は、男女でのみ有意差があり、女子は男子より乳児への対児感情がよかった。また、乳児への世話経験は、年少きょうだいの有無でのみ有意差がみられ、年少きょうだいのいない児童は、年少きょうだいのいる児童に比べて世話経験がなかった。赤ちゃんイメージの変化は、男子は交流会によって乳児をより強く、おもしろい存在と捉えていることがわかり、年少きょうだいのいる児童においても乳児に対するおもしろさが増していることが明らかとなった。

キーワード：乳児、交流学習、小学生、赤ちゃんイメージ

Ⅰ 背景と目的

近年、少子核家族化の進行や地域とのつながりの希薄化など、子育てをめぐる家庭や地域の環境が著しく変化している。養育者にとっては、家庭内あるいは地域社会において日々の子育てを相談したり、支援や協力をお願いしたりできる相手がいない状況がある。そのため、子育ての負担や不安、孤立感が高まり、子育てに悩む保護者が増加している（厚生労働省、2007）。また、児童虐待の発生も後を絶たず、大きな社会的な問題になっている。虐待死の子どもは、0歳が6割と最も多く、その主な動機は「泣き止まなかったことにいらだった」や「しつけのつもり」など、実父母の養育能力の低さや衝動性の問題が指摘されている（厚生労働省、2016）。この背景には、現代の若者たちは乳幼児と直接触れ合う体験がないまま成長したため、大人になっても子どもとかかわることを不安に思ったり、子どもへの接し方がわからないといったことが要因の一つとして挙げられている。育児という行為は、先天的に組み込まれた行

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 講師

** 奈良教育大学 教育学部 家庭科教育講座 准教授

動ではなく学習性のものである。それゆえ、親になる前から親になるための資質を育むことが重要であり、全ての児童生徒が学ぶ学校教育において、幼い子どもを理解し、適切にかかわれる養護的能力の育成が求められている。

学校教育では、2008（平成20）年に改訂された中学校学習指導要領の技術・家庭の家庭分野において、幼児と触れ合うなどの活動を通じて幼児への関心を高め、かかわり方を工夫できるような学習が必修となっている。また、2017（平成29）年告示の新学習指導要領においても、中学校技術・家庭科の家庭分野では、「家族の機能を理解し、家族や地域の人々と協働することや、幼児触れ合い体験、高齢者との交流等、人とよりよく関わる力を育成するための学習活動を一層充実すること」、高等学校家庭科では、「子供を生み育てることや子供と関わる力を身に付けるなどの乳幼児期に関する内容や、乳児との触れ合いや子供とのコミュニケーションに関する内容を充実すること」が示されている。さらに、小学校家庭科でも「A家族・家庭生活」で、「幼児又は低学年の児童、高齢者など異なる世代の人々とのかかわりに関する内容を新設し、家族・家庭生活に関する内容の充実すること」が明記されている。このように、新しい学習指導要領でも世代間交流の意義と重要性を示し、児童期からの体験的・実践的な取り組みを勧めている。

世代間交流に関して、兵庫県は全国的にも早く2000年から学校教育の中に乳幼児と直接触れ合う保育体験学習を取り入れている。その教育的効果についても、生徒の情意面での効果が得られたことがわかっている（松村・大路，1998；田中，1999）。また、2002年に厚生労働省は、赤ちゃんに対する愛着の感情を育むことや中高生たちにとって、乳幼児とのかかわり体験が“育児不安”からもたらされやすいといわれる虐待の予防につながるとし、「赤ちゃんと中高生とのふれあい事業」の推進を提言した。さらに、2003年に成立した「次世代育成支援対策推進法」において、次世代育成支援の一方策として、未来の親となる世代である小中高校生が、やがて成長した時、父親や母親になる不安を軽減でき、児童虐待防止の一助となるような支援をすることを目的に、乳幼児と触れ合う事業をスタートさせている。

そして、神戸市では、2004（平成16）年から次世代育成事業として「命の感動体験」（以下：赤ちゃん交流会）を実施している。この事業の目的は、小学生が乳幼児やその母親と触れあうことで、命の尊さや育児の楽しさ・大変さを理解し、将来親になる時の現実的なイメージを持つことであり、市内全域での実施を目指して始まった。しかし実際には10年以上が経過した現在においても未だ全域での実施には至っていない。そこには、事業運営の困難さがあるとともに、本事業による児童への学習効果が十分に検証されていないと考えられる。これまでも乳幼児との触れあい体験学習に関する研究報告は多く存在する（佐藤，2004；倉持ら，2009；考藤ら，2016）。しかし、それらはいずれも中学生以上の思春期の子どもを対象としたもので、児童期の小学生を対象とした研究はみられない。そこで、本研究では、神戸市が実施している命の感動体験事業の取り組みから、赤ちゃん交流会が児童の乳児に対する意識に与えた影響を

性別と年少きょうだいの有無から明らかにする。また、今回実施した教育プログラムが本事業の目標を達成する学習内容となっていたのかについても検討し、継続実施に向けての課題を考察する。

II 研究方法

1. 調査対象

神戸市内の公立小学校6年生3クラスの児童が本研究の対象であった。そのうち、アンケート記入日に欠席であった2名を除く80名（男子48名、女子32名）を分析対象とした。なお、赤ちゃん交流会前後でみた赤ちゃんイメージについては、項目に欠損がない71名（男子42名、女子29名）を分析対象とした（有効回答率88.6%）。赤ちゃん会の参加親子は17組で保護者はいずれも母親であった。乳幼児については、男児9名、女児8名の17名である（生後3ヵ月児から2歳7ヵ月児）。また、学級担任教諭3名に対しても、児童が本事業に参加してどのように変化したかや事前・事後学習の内容、指導するうえでの気になること等を尋ねた。担任教諭の属性は、教諭Aが、40代男性、教員歴23年で本プログラム実施経験あり。教諭Bは、20代男性、教員歴4年で本プログラム実施経験なし。教諭Cは、20代女性、教員歴6年で本プログラム実施経験なしである。

2. 調査期間

調査期間は、2015年10月である。

3. 交流プログラムの概要と授業の流れ

命の感動体験事業は、学校と地域が連携して取り組むことを基本方針としている。そのため、実施小学校のみならず、地域で子育てをする乳幼児の保護者や地域の子育て支援を行っている民生委員児童委員協議会、地域の行政及び教育機関が共同で行う。

本来は小学校独自開催が基本であるが、初年度は行政が主体となってプログラム内容や関係機関とのコーディネートを行った。2年目以降は小学校が中心となり地域の関係機関等の協力を得て主体的に継続していくことが望まれている。実施初年度にあたる今回は、行政主導の打合せが2回（6月、8月）開催され、本事業の概要と目的、関係機関の紹介、開催時期や事業の進め方等について説明・話し合いが行われた。本事業の担当者は、市職員、小学校教員、主任児童委員、神戸っ子応援団、地域子育て支援センター職員、S大学教職員である。

プログラム当日の活動の流れを表1に示す。児童に対しては、赤ちゃん交流会の前後に担任教諭からそれぞれ1時間の学習が行われた。事前学習では、赤ちゃんの衣服や写真から乳児の特徴や発達について学んだり、児童が生まれるまでの様子を家族へのインタビューから知る内容であった。事後学習は、赤ちゃん交流会での体験を中心に、命の大切さについて考える学習

が行われた。本事業に参加する親子の募集は、小学生の保護者に案内を配布したり、地域子育て支援機関を通じてポスターを貼るなどして赤ちゃんボランティアを呼びかけた。その結果、赤ちゃん会には17組の親子が参加した。児童とのふれあい体験では、1グループに1～2組の親子と小学生6～7名を割当て、各グループには少なくとも2名の担当スタッフ及び学生ボランティアが参加する中で児童と乳幼児ができるだけ多くふれあえるよう仲介した。

表1 赤ちゃん交流会のスケジュール

日 時	2015年10月7日（水） 9：40～10：40	
時 間	小学生（82名）	乳幼児親子（17組）
場 所	体育館	図書館
9：40	○オリエンテーション 諸注意	○受付 説明：児童とのグループワーク 母子準備 自由遊び
9：45	抱っこ体験 沐浴人形使用	
9：55	○挨拶 ○ふれあい体験（交流） （小学生6～7人+母子1～2組/G 12G） 交流の流れ 1：児童の自己紹介	

4. 倫理的配慮

調査は、筆者が事前に協力校を訪問し、学校長と担当教諭に対して研究主旨や目的、調査内容及び方法を説明した。また、研究結果についても個人名や情報等が特定されないよう統計的に処理し、個人の公表はしないことを伝えた。個人情報の取り扱いについても確認し、学校長から承諾を得た上で実施した。

児童へのアンケートは、担任教諭に依頼した。担任教諭は、学級活動の時間において児童に口頭で調査協力のお願いと倫理的配慮を説明し、調査用紙の回収をもって調査協力に同意したとみなした。

5. 調査内容

調査内容は、属性の「氏名」と「性別」、「赤ちゃんイメージ」を事前調査・事後調査の共通項目とした。また、事前調査票には「児童のきょうだい関係」、「体験学習以前の乳幼児とのふれあい経験（3件法6項目）」、「乳幼児への好意（5件法1項目）」、「交流会への期待（5件法1項目）」について尋ねた。事後調査票では、「交流会の感想（5件法1項目）」、「交流時の乳幼児の様子（7件法1項目）」、「交流方法（4件法1項目）」に加え、「交流会の感想」を自由

に書いてもらった。「赤ちゃんイメージ」は、野村ら（2007）と佐藤（2004）の先行研究を参考にして、子ども観の測定に有効性が示された7種類の形容詞対用いてSD法を作成した。SD法での回答は5段階で評定してもらった。否定的な形容詞（A）を1点、肯定的な形容詞（B）を5点とし、1点から5点までの尺度得点とした。形容詞対は、「弱い－強い」、「弱々しい－たくましい」、「無力な－能力のある」、「静かな－うるさい」、「頼りない－たのもししい」、「つまらない－おもしろい」、「かたい－やわらかい」であった。

6. 分析方法

事前事後調査から得られた結果について、男女と年少きょうだいの有無から分析した。統計処理には、SPSS24.0 for Windowsを用い、男女、年少きょうだいの有無のクロス表の検定は χ^2 検定を行った。また、赤ちゃんイメージについては、赤ちゃん交流会の前後において、それぞれの項目の尺度得点を算出し、2群間の平均値の差の検定（ t 検定）を行った。なお各検定においては、 $p<.05$ をもって統計学的に有意とした。

「赤ちゃん交流会後の感想」における自由記述については、事後学習のふり返しシートから、赤ちゃん交流会を通して学んだ内容を①育児について（育児の喜びや大変さに関する内容）、②妊娠・出産に関する母親について（妊娠や出産中の母親の体験に関する内容）、③子どもについて（乳児の生活や抱っこ仕方などのかかわり方・養育方法、子どもの発達に関する内容）、④その他（命の大切さや親への感謝、自分の成長の振り返り、周りの支援などに関する内容）の4つに分類した。分類にあたっては、2名の判別者が個別に判定をおこなった。一致率は、すべてにおいて83.3%以上で信頼性は確かめられた。不一致部分については、協議により判定をおこなった。

III 結果

1. 対象の属性

性別、児童のきょうだいの内訳については、表2に示す。また、長子と中間子を合わせて、「年少きょうだい有り群（以下「有り群」）」、末子と一人っ子を合わせて「年少きょうだい無し群（以下「無し群」）」とする。

表2 基本属性

カッコ内は割合

	年少きょうだい有り群		年少きょうだい無し群		合 計
	長子	中間子	末子	一人っ子	
男 子	21 (43.8%)	7 (14.6%)	15 (31.6%)	5 (10.4%)	48 (60%)
女 子	9 (28.1%)	1 (3.1%)	18 (56.3%)	4 (12.5%)	32 (40%)
合 計	30 (37.5%)	8 (10%)	33 (41.3%)	9 (11.3%)	80 (100%)
	38 (47.5%)		42 (52.5%)		

2. 性差について

(1) 対児感情

赤ちゃん交流会前の男子、女子の対児感情を図1に示す。対児感情については男女に有意な差がみられ、女子は男子より乳児ことが好きな児童が多いことがわかった ($\chi^2=14.5$, $df=4$, $p<.05$)。

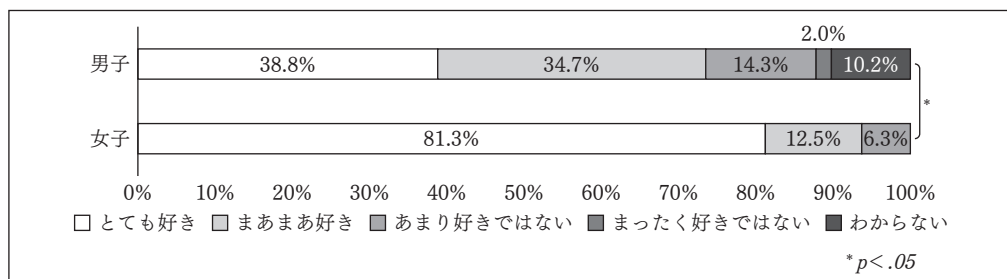


図1 児童の乳幼児に対する好意

(2) 乳児への世話経験

世話経験について、①抱っこする、②一緒に遊ぶ、③おむつをかえる、④食事・ミルクを与える、⑤着替えさせる、⑥本の読み聞かせをするの6項目を設定し、「まったくない」「ある」「たびたびある」から回答を求めた。その結果、男女に有意な差はみられなかったが、男子は女子より乳幼児に接したり世話したりする経験が乏しい傾向が示唆された(表3)。

表3 性差における赤ちゃんの世話経験

		男子 n=48		女子 n=32		χ^2
		度数	%	度数	%	
抱っこする	まったくない	20	41.7%	8	25.0%	4.05
	ある	19	39.6%	20	62.5%	
	たびたびある	9	18.8%	4	12.5%	
一緒に遊ぶ	まったくない	16	33.3%	7	21.9%	3.04
	ある	22	45.8%	21	65.6%	
	たびたびある	10	20.8%	4	12.5%	
おむつをかえる	まったくない	35	76.1%	22	68.8%	0.67
	ある	8	17.4%	8	25.0%	
	たびたびある	3	6.5%	2	6.3%	
食事・ミルクを与える	まったくない	28	59.6%	14	43.8%	2.17
	ある	16	34.0%	14	43.8%	
	たびたびある	3	6.4%	4	12.5%	
着替えさせる	まったくない	28	59.6%	14	43.8%	2.17
	ある	16	34.0%	14	43.8%	
	たびたびある	3	6.4%	4	12.5%	
絵本の読み聞かせをする	まったくない	32	69.6%	18	58.1%	1.25
	ある	11	23.9%	11	35.5%	
	たびたびある	3	6.5%	2	6.5%	

（３）赤ちゃん交流会への期待

赤ちゃんとのふれあい交流会が楽しみかどうかを尋ねた結果、男子は「とても楽しみ」（49%）と「まあまあ楽しみ」（32.7%）を合わせた81.7%の児童が赤ちゃん交流会を楽しみにしていた。女子は8割近くが「とても楽しみ」（78.1%）と答え、「まあまあ楽しみ」（18.8%）を合わせた96.9%が赤ちゃん交流会を楽しみにしていることがわかった。男女ともほとんどの児童が赤ちゃん交流会に期待感を示していることがわかった。一方で赤ちゃんとの交流会を「あまり楽しみではない」（6名、8.2%）「まったく楽しみではない」（1名、2.0%）と答えた男子児童の存在も明らかになった（図2）。男女の有意差は認められなかった。

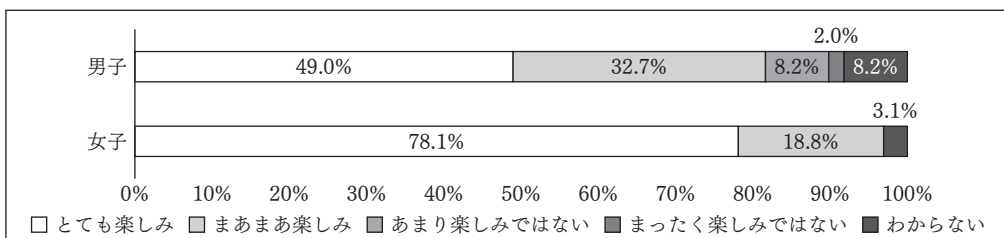


図2 赤ちゃん交流会への期待

（４）赤ちゃん交流会後の感想

赤ちゃん会終了後に、ふれあい交流が楽しかったかを尋ねた結果を図3に示す。男子は「とても楽しかった」（73.9%）と「まあまあ楽しかった」（23.9%）となり、全体の97.8%が楽しいと回答した。女子は、全員が「楽しかった」と答え、「楽しくない」と答えた児童はいなかった。このことから、乳児とのふれあい交流活動は、実施前の期待を超える楽しさがあり、満足した内容であったことが示唆された（図3）。

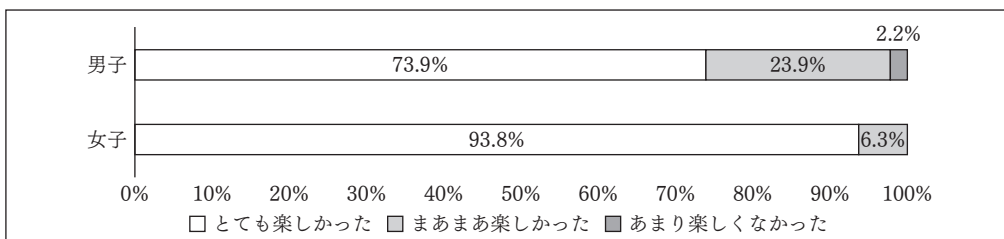


図3 赤ちゃん交流会後の感想

（５）赤ちゃん交流会後の学び

赤ちゃん交流会後の振り返りシートから、赤ちゃん交流会を通して学んだ内容を4つに分類した。その結果、男女ともに、「子どもについて」の回答が最も多く、7割の児童が乳幼児の特性や発達、かかわり方に対して何らかの気づきや学びがあった（図4）。次に多かった2頁

目は、女子は「育児について」(40.6%)、男子は「その他」(33.3%)であった。女子は母親の妊娠や出産・子育てに関するエピソードを聞いて「赤ちゃんのお世話をするのは大変」「赤ちゃんを育てるのは大変そうだけど、育ててみたい」など、育児の大変さや楽しさに注目した感想が多かった。一方で男子は、「命はこうやって受け継がれていく」や「自分も生まれた時はあんな感じだったのかなあ」「お母さんはすごい」など、命の尊さや自分の成長の振り返り、親(母親)への感謝に気づいた記述が多くみられた。男子は命や子育てを客観的に捉えており、目の前にいる母子の姿を自己投影することで自己理解につながる学びができていることがわかった。

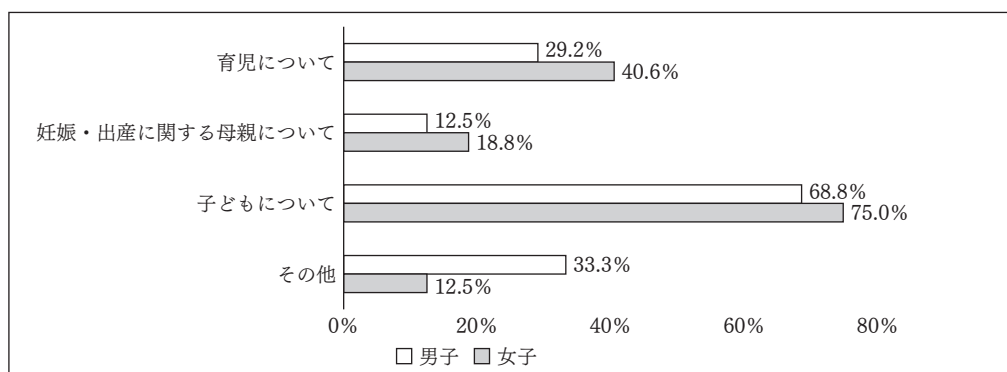


図4 赤ちゃん交流会の学び

(6) 児童の赤ちゃんイメージの変化

赤ちゃん交流会前後の児童の赤ちゃんイメージを表4に示す。男子は、「弱い—強い」($t(43)=2.235, p<.05$)と「つまらない—おもしろい」($t(43)=2.564, p<.05$)の2項目に有意差がみられ、赤ちゃん交流会によって赤ちゃんをより「強く」て「おもしろい」存在と捉えていることがわかった。一方、女子は全ての項目で有意な差が見られなかった。

表4 赤ちゃん交流会の前後における児童の赤ちゃんイメージ

項目	男 子			女 子		
	事前 (SD)	事後 (SD)	t 値	事前 (SD)	事後 (SD)	t 値
弱い—強い	1.69 (1.14)	2.10 (1.23)	-2.42 *	1.93 (1.28)	1.79 (0.98)	0.75
弱々しい—たくましい	1.98 (1.00)	2.17 (1.19)	-1.24	1.97 (0.94)	2.10 (0.90)	-0.89
無力な—頼もしい	2.60 (1.17)	2.43 (1.13)	0.93	2.31 (1.00)	2.34 (0.90)	-0.18
静かな—うるさい	3.40 (1.01)	3.17 (1.06)	1.28	3.21 (1.11)	3.03 (0.87)	1.00
頼りない—能力がある	2.33 (1.32)	2.48 (1.27)	-0.68	2.45 (1.21)	2.45 (1.09)	0.00
つまらない—おもしろい	3.86 (1.00)	4.21 (0.84)	-2.42 *	4.14 (0.83)	4.24 (0.79)	-0.83
かたい—やわらかい	4.38 (0.76)	4.52 (0.63)	-1.23	4.62 (0.68)	4.52 (0.74)	0.90

* $p<.05$

2. 年少きょうだいの有無

(1) 対児感情

乳幼児の好き嫌いについて、「有り群」は、「とても好き」63.3%、「まあまあ好き」21.1%となり、84.4%の児童が乳幼児に好意を示していることがわかった。一方、「有り群」の中に、「まったく好きでない」と回答した児童が1名(2.6%)いることもわかった。「無し群」については、「とても好き」48.8%、「まあまあ好き」30.2%となり、79%の児童が乳幼児を好きと回答していた。また、「無し群」は、「あまり好きではない」が16.3%となり、「有り群」に比べて乳幼児に苦手意識を感じている児童が多い傾向が示唆された。年少きょうだいの有無では、有意な差がみられなかった。

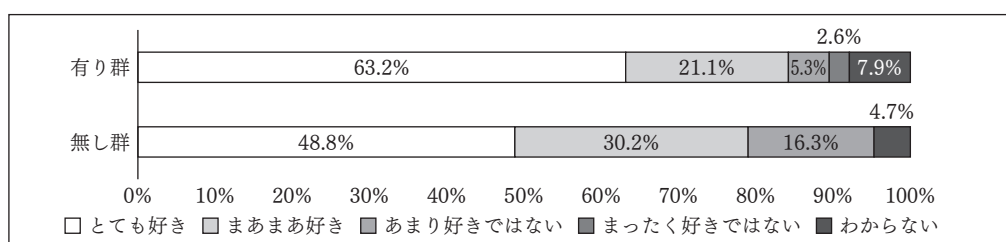


図5 児童の乳幼児に対する好意

(2) 乳児への世話経験

世話経験では、「抱っこする」($\chi^2=8.97$, $df=2$, $p<.05$)、「一緒に遊ぶ」($\chi^2=11.78$, $df=2$, $p<.05$)、「おむつを替える」($\chi^2=14.10$, $df=2$, $p<.01$)「食事・ミルクを与える」($\chi^2=16.30$, $df=2$, $p<.001$)「着替えさせる」($\chi^2=11.76$, $df=2$, $p<.001$)「絵本の読み聞かせをする」($\chi^2=14.0$, $df=2$, $p<.01$)と、すべての項目で有無差がみられた(表5)。このことから「無し群」は、「有り群」に比べて乳幼児を世話した経験がないことが明らかになった。特に「おむつを替える」「食事・ミルクを与える」「着替えさせる」「絵本の読み聞かせをする」については、「無し群」の児童の7割以上が「まったくない」と回答し、「有り群」と「無し群」の経験に顕著な差がみられた。

表5 年少きょうだいの有無における赤ちゃんの世話経験

		有り群 n=38		無し群 n=42		χ^2
		度数	%	度数	%	
抱っこする	まったくない	7	18.4%	21	50.0%	8.98 *
	ある	24	63.2%	15	35.7%	
	たびたびある	7	18.4%	6	14.3%	
一緒に遊ぶ	まったくない	4	10.5%	19	45.2%	11.80 **
	ある	26	68.4%	17	40.5%	
	たびたびある	8	21.1%	6	14.3%	
おむつをかえる	まったくない	20	54.1%	37	90.2%	14.10 **
	ある	14	37.8%	2	4.9%	
	たびたびある	3	8.1%	2	4.9%	
食事・ミルクを与える	まったくない	12	31.6%	30	73.2%	16.30 ***
	ある	23	60.5%	7	17.1%	
	たびたびある	3	7.9%	4	9.8%	
着替えさせる	まったくない	12	31.6%	30	73.2%	11.76 ***
	ある	23	60.5%	7	17.1%	
	たびたびある	3	7.9%	4	9.8%	
絵本の読み聞かせをする	まったくない	17	45.9%	33	82.5%	14.00 **
	ある	17	45.9%	5	12.5%	
	たびたびある	3	8.1%	2	5.0%	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(3) 赤ちゃん交流会への期待

赤ちゃん交流会を楽しみしているかを尋ねると、「有り群」は、「とても楽しみ」65.8%、「まあまあ楽しみ」21.1%であった。「無し群」は、「とても楽しみ」55.8%、「まあまあ楽しみ」32.6%となり、全体の8割以上が乳児との交流を楽しみにしていることがわかった(図6)。また、赤ちゃん交流会を「楽しみではない」と答えた割合は、「無し群」より「有り群」の方が高く、「有り群」には、乳児に対してネガティブな感情を示している児童がいることがわかった。両者に有意な差はみられなかった。

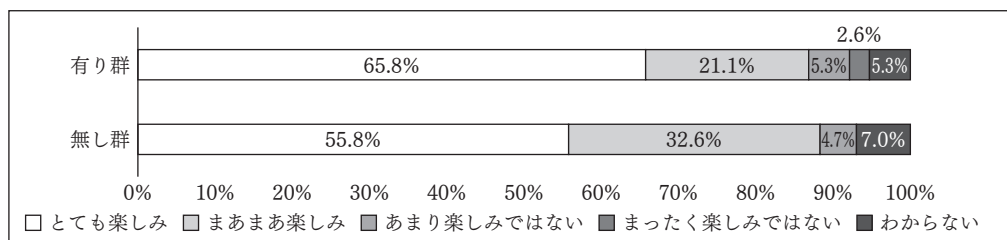


図6 赤ちゃん交流会への期待

（４）赤ちゃん交流会の感想

赤ちゃん交流会が楽しかったかについては、「有り群」は、「とても楽しかった」（83.8％）と「まあまあ楽しかった」（13.5％）を合わせた97.3％が楽しいと答えた。「無し群」は、100％の児童が赤ちゃん交流会を「楽しかった」と回答した。年少きょうだいのいない児童は、これまで乳幼児と関わる経験が少なかったが、楽しみながら交流できたことが示唆された。

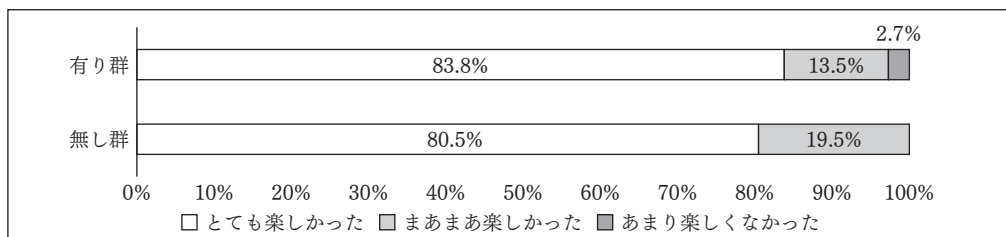


図7 赤ちゃん交流会への期待

（５）赤ちゃん交流会後の学び

年少きょうだいの有無で赤ちゃん交流会での学びについて検討した結果を図8に示す。性差と同様に最も多いカテゴリーは「子どもについて」であった。「無し群」は、「自分より小さい子への接し方（優しく・笑顔で）を学べた」「触り心地が柔らかくて体が弱い」「抱っこした時に首がぐらぐらしたり」などの記述があり、抱っこの仕方や乳児の特徴を実際にふれあった体験から学んでいることが示唆された。また、「有り群」は、「泣いてばかりだけど」「赤ちゃんは泣くことで表現する」「こうしたら泣くとかわかった」など、赤ちゃんの泣きに関する記述が多く、赤ちゃんの感情やコミュニケーションに着目する傾向が強かった。「その他」については、「有り群」は、母親への感謝の気持ちや客観的に自分の成長を振り返るような気づきが多かった。例えば、「赤ちゃんはお母さんのおかげで生きていける」「お母さんがどれだけ苦労して私たちを生んでくれたか」などの回答があった。

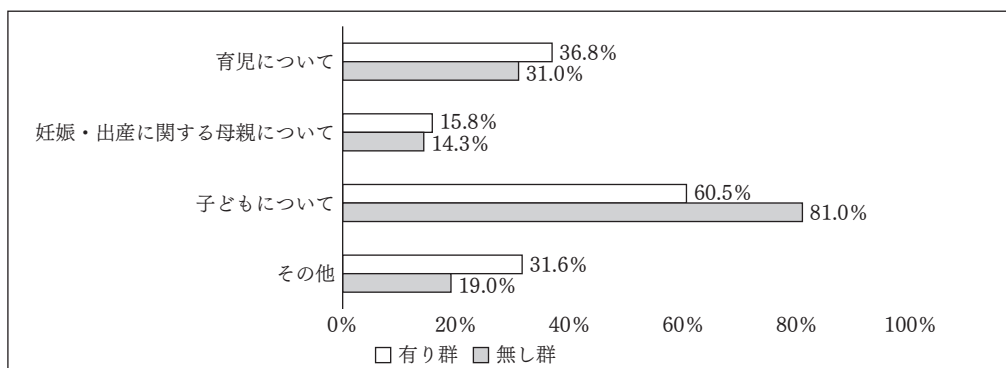


図8 赤ちゃん交流会での学び

(6) 児童の赤ちゃんイメージの変化

赤ちゃん交流会前後の赤ちゃんイメージでは、「有り群」において「つまらないーおもしろい」の項目で有意な差がみられた ($t(35)=2.847, p<.01$)。このことから、年少のきょうだいがいる児童は、赤ちゃん交流会後に赤ちゃんをよりおもしろいと感じていることが明らかとなった(表6)。

表6 赤ちゃん交流会の前後における児童の赤ちゃんイメージ

項目	有り群			無し群		
	事前 (SD)	事後 (SD)	t 値	事前 (SD)	事後 (SD)	t 値
弱いー強い	1.82 (1.17)	2.12 (1.12)	-1.66	1.76 (1.23)	1.84 (1.14)	-0.44
弱々しいーたくましい	1.94 (0.95)	2.09 (1.08)	-0.93	2.00 (1.00)	2.19 (1.08)	-1.23
無力なー頼もしい	2.68 (1.09)	2.35 (1.01)	1.57	2.30 (1.10)	2.43 (1.07)	-0.84
静かなーうるさい	3.29 (0.97)	3.12 (1.01)	0.92	3.35 (1.14)	3.11 (0.97)	1.36
頼りないー能力がある	2.47 (1.40)	2.50 (1.13)	-0.12	2.30 (1.15)	2.43 (1.26)	-0.96
つまらないーおもしろい	4.03 (0.94)	4.47 (0.71)	-2.68 *	3.92 (0.95)	4.00 (0.85)	-0.68
かたいーやわらかい	4.56 (0.66)	4.65 (0.49)	-0.77	4.41 (0.80)	4.41 (0.80)	0.00

* $p<.05$

IV 考察

きょうだい構成については、一人っ子および年少きょうだいがいない児童が半数以上いた。子どもたちの生活環境において乳幼児と接する機会が少なくなっていることが推測される。

児童の対児感情については、男女でのみ有意な差がみられ、女子は男子よりも乳幼児が好きと答える割合が有意に高かった。男女で対児感情に違いが出たことについては、女子は幼い時期から乳幼児と多くの接触機会を持つように周囲から期待され、接触することが動機づけられることで乳幼児への興味・関心や肯定的感情につながるのではないかと考える。また、赤ちゃんを「あまり好きでない」「全く好きでない」と答え否定的感情を示した児童9名(男子7名、女子2名)については、乳幼児との接触経験が影響すると考える。先行研究によれば、生育過程において児童期から乳児との接触体験を多く持った高校生・大学生は、ポジティブな対児感情が高いことがわかっており、対児感情の発達には、男女という性的要因よりもむしろ生育史上の体験が大きく影響を受けると言及している(花沢, 1998)。今回の調査で乳児に対してネガティブな感情を抱いていた児童は、「有り群」3名、「無し群」6名で、年少きょうだいがいない児童の方が多かった。このことから、身近に赤ちゃんや乳幼児がいない、すなわち、乳幼児との接触経験の少なさが対児感情に影響を与える結果となった。児童期の対児感情についても、乳幼児との接触経験が関係すること示唆された。

次に、乳児への世話経験では、男女で有意な差がみられなかったが、年少きょうだいの有無では、すべての項目で有意差が確かめられた。特に「おむつをかえる」や「食事・ミルクを与える」「着替えさせる」等の養護的な内容で「無し群」の経験のなさが顕著であった。近年、きょう

うだいの減少や地域コミュニティの希薄化なども影響し、子どもの世話体験は、どの世代においても乏しくなっている（江藤，1999；ベネッセ教育研究所，1997；子どもの体験活動研究会，1998）。中・高生を対象とした保育体験学習の交流内容に関して、「抱っこ」や「一緒に遊ぶ」経験では、子どもの表面的な理解しかできず、子育てにおける行為の理解には至らない（佐藤，2004）との考えもある。というのも、実際の子育てには、不潔なところや煩わしさも伴うため、「子育て」という行為そのものを理解するためには、乳児の世話をする中で、子育てのネガティブな面を含めた経験が必要というのである。赤ちゃん交流会では、母親から出産や子育ての話を聞き、児童が乳児を抱っこする体験を主な活動としたが、児童に将来親になる時の現実的なイメージを持たせることが学びのねらいとするなら、乳児との一日の生活を想像できるような学習内容やより具体的な場面でのかかわり方などプログラムの見直しが必要であろう。

赤ちゃんイメージについては、赤ちゃん交流会の前後で、乳児をより強く、おもしろい存在と捉えていることがわかり、年少きょうだいのいる児童においても乳児に対するおもしろさが増していることが明らかとなった。

先行研究によれば、中学生を対象とした保育体験学習前後の赤ちゃんイメージの変化で、体験前は「やかましい」が多くみられたが、体験後にはほとんどなくなり、「かわいい」や「たくましい」などが増したことが明らかとなっている（石川，2000）。また、細谷と日口（2012）は、高校家庭科の保育の授業に関して、男子は講義に加えてDVDを視聴した方が、講義のみよりも保育や子どもの発達に関する具体的な興味・関心が多く生じたことを報告し、実際の子どもの映像を見ることで保育や子どもの発達に関する興味・関心が喚起される可能性を示唆している。本研究で赤ちゃん交流会後に男子が赤ちゃんのイメージをよりおもしろい存在に捉えたということは、実際に子どもとかかわり、子どもの具体的な姿を見たり聞いたりする中で、男子児童の乳児への興味や関心が喚起されたと考えられる。直接かかわることの有効性が明らかになった。一方、乳児との交流学習時のかかわり方について、接触体験のない児童は、乳幼児との交流の機会があっても、積極的にかかわることができないことが報告されている（富井・松村，2008）。今回、年少きょうだいのいる「有り群」の児童は、乳児とかかわることによって赤ちゃんへのイメージをよりおもしろい存在へと変化させたが、年少きょうだいのいない「無し群」では、有意な差がみられなかった。この点については、児童と乳児のかかわり方が影響しているのではないかと考える。おそらく「有り群」はこれまでに乳児と関わった経験があり、交流場で積極的に乳児とかかわることができ、「無し群」は、乳児のかかわり経験がなく、乳児のかかわり方がわからなかったり、かかわりに対する自信のなさから消極的になっていたことが推測される。本研究では、赤ちゃん交流会でのグループごとのかかわりの様子について検討できていない。しかし、事後の担当者のお話では、グループで乳児と児童とかかわりに違いがみられたとの指摘があった。本事業の学習効果を考える際には、それぞれの児童が体験

学習によってどのように変容していくのか、そのプロセスを追求することは、児童への指導を考える上で重要である。今後は、交流時の児童のかかわり方についても検討し、積極的にかかわれない児童には、教師が個別にかかわり方を指導したり、自信を持たせる言葉かけをするなど、指導上の配慮や工夫が必要だろう。

赤ちゃん交流会での学びについては、性差や年少きょうだいの有無に関係なく、「子どもについて」の回答が最も多かった。また、赤ちゃん交流会後の学習の楽しさについても、97%以上の児童が「楽しかった」と答え、交流学习に対する満足度は高かったといえる。また、男子は母親の話や親子のやり取りから、命の大切さや親への感謝、自分の成長を振り返り自己理解を深めるなど、自尊感情や自己肯定感を高める学びができていた。全体としても、気づきや学びに同様の傾向がみられた。よって、赤ちゃん交流会後の児童は、命の尊さや育児の楽しさ・大変さを理解し、親への感謝や自分の成長を振り返る学びができており、本事業の目標を概ね達成していることが確認できた。

V 今後の課題

以下では、本プログラムの継続実施に向けた今後の課題について述べる。

1つ目は活動の流れについてのさらなる検討である。事前調査の対児感情や赤ちゃん交流会後の感想から、交流後も乳児に対してネガティブ感情をもっている児童の存在も明らかとなり、交流時の乳児とのかかわり方や交流内容に検討が必要であることがわかった。扇原と首藤(2016)は、乳幼児との接触時に体験した感情により、その後の乳幼児への接近行動に違いが生じることを報告している。接触時に良い感情を抱けば、その後も乳幼児とふれ合おうとする動機づけがなされるが、嫌な感情を抱けば、接触に対して回避的になることを指摘している。実際の交流場面では、児童と母親たちは、当日顔を合わせており、児童は照れや戸惑いがみられた。また、母親も場所見知りや人見知りで泣いているわが子をあやすことに手がかかったり、移動ができる子どもについては、どこかへ行ってしまわないかと注意を払わなければならない、児童からの受け答えに集中できない場面もあった。これは、乳幼児の発達特徴やこの時期の子どもは目が離せないという子育ての大変さを実感する上では良いことなのかもしれないが、母親から出産や子育ての経験談をじっくり聞く機会が持てないグループがあったのは残念である。これらを考慮すると、事前学習の中で予め交流親子の情報や、母親からの子育て体験記、あるいは、交流児童からのビデオメッセージなどで間接的な交流を重ねていることが緊張感や照れなどを緩和することになるのではないかと考えられる。または、インタビューと交流の順番を逆にして、先に乳児とふれあう活動を行うことで児童の緊張を和らげた上で母親への質問時間を設けると、乳児がぐずっても児童が子どもの相手になりながら話を聞くことも考えられ、円滑なインタビューが可能になるだろう。交流会の進め方や事前学習の充実についても検討していく必要があるだろう。

2つ目はプログラム内容の検討である。本事業では、小学生が乳幼児やその母親とふれ合うことで、命の尊さや育児の楽しさ・大変さを理解し、将来親になる時の現実的なイメージが持てるようになることを目的としている。研究結果から、児童は乳児とふれあいことによって赤ちゃんに対するイメージを変容させ、子ども理解や子育て観、さらには自己理解を深めているという学習効果が示唆された。しかし、20分間の交流で、児童が命の尊さや将来親になるイメージを感じ取るための十分な関わりができたとはいい難い。考藤ら（2016）は、中学・高校生の触れあい体験学習の課題として、「子ども・子育てに関する意識」や「子ども像」を変化させるには、乳幼児との触れあう機会を短時間での表面的な関りや一回だけの関りでは、十分な効果が期待できないと言及しており、今回の研究でも、同様の課題が挙げられた。子ども像の変化を実感できるような場面や十分な関わりの時間を設定することが求められる。

3つ目は教育課程全体を見通したカリキュラムの位置づけである。本研究における授業実践は、6年生の2学期に単発的な学習として行ったが、先に述べたように、一回だけの関わりでは、十分な効果を期待することができない（考藤ら，2016）。また、小学校の担任教員は毎年変わるの、実施時の問題が次年度に活かされないことも課題である。本事業を教育課程に組み込み、実施後の結果を毎回フィードバックする体制を整えることが大切であり、他教科、課外活動、他校種との連携、地域の実態、児童の実態を踏まえたプログラムのあり方を考えていく必要があるだろう。

最後に、関係多機関との連携をどうするかである。各機関の役割や分担範囲を明確にし、それらをコーディネートする存在が必需であろう。また、赤ちゃんとの交流プログラムを充実させるには、事前に児童と乳幼児及びその保護者をつないでおくことが重要であり、その役割として大学の保育・教員養成課程コースに在籍する学生が期待される。

引用文献

- 野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子：「子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ」
人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 7（1），169-180，2007年
- 大路雅子・松村京子「高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究（第2報）－対児行動出現率と対児感情との関係－」日本家庭科教育学会誌 41（4），39-43，1998年
- 大路 雅子・松村京子：「高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究（第1報）－特徴的対児行動－」
日本家庭科教育学会誌 41（4），31-38，1998年
- 中田佳代子・村田好子・松村京子：「中学生の幼児体験学習による対児感情の変化－2回体験の効果」応用教育心理学研究 16（22），41-46，1999年
- 大路雅子・松村京子：「幼児体験学習時の中学生と高校生の対児行動」小児保健研究 61（3），489-495，2002年
- 松村京子・大路雅子・山口香織：「幼児との交流時における高校生の対児行動：対児感情と性別による連

- い」小児保健研究 61(1), 66-72, 2002年
- 松村京子：「幼児との交流時における高校生の対児行動－対児感情と性別による違い－」小児保健研究 61(1), 66-72, 2002年
- 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 家庭編，開隆堂，2010年
- 文部科学省：中学校学習指導要領解説 家庭編，開隆堂，2008年
- 文部科学省：小学校学習指導要領解説 家庭編，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/27/1387017_9.pdf，2017.09.10取得，2017年
- 厚生労働省：地域子育て支援事業実施のご案内，<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/gaido.pdf>，2017.09.10取得，2007
- 厚生労働省：子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第12次報告），<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137028.html>，2017.09.10，取得，2016
- 厚生労働省：第14回出生動向基本調査，http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf，2017.10.01取得，2010年
- 佐藤洋美：「乳幼児とのふれあい低件学習が中学生の子育てに対するイメージに与える 影響」生活体験学習研究 日本生活体験学習学会誌 第4巻 35-54，2004年
- ベネッセ教育研究所：モノグラフ・小学生ナウ Vol.17-1 母親は変わったかー若い世代の お母さんへーベネッセコーポレーション，1997年
- 江藤礼子・今泉岳雄他：「育児の悩みと母親の社会的・心理的要因の関連」第46回日本小児保健学会論文集 1999年保障審議会，2016年
- 石川清美：「赤ちゃんふれあい体験学習の効果－アンケート調査からみた効果」小児保健研究 59(2)，159-165，2000年
- 倉持清美・伊藤葉子・岡野雅子・金田利子：「保育現場における中・高校生のふれ合い体験活動の実施状況と受け止めかた」日本家政学会誌 60(9)，817-823，2009年
- 考藤悦子・片山美香・高橋敏之・西山修家：「庭科保育領域における触れ合い体験学習の意義と課題」岡山大学教師教育開発センター紀要 6，113-122，2016年
- 細谷里香・日口由美子：「高校家庭科「保育」の授業における視聴覚教材活用の有効性」滋賀大学教育学部紀要 教育科学 (62)，127-135，2012年
- 富井和美・松村京子：「乳児との定期的交流学習による児童の情緒応答性の発達」教育実践学研究 10(1)，1-9，2008年
- 花沢成：「乳児接触体験と対児感情の発達」日本教育心理学会総会発表論文集 30，404-405，1988年
- 砂上史子，日景弥生，中嶋明子，盛 玲子：「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第2報）：生徒の感想文にみる保育体験学習者の経験内容の分析」，日本家庭科教育学会誌 48(1)，10-21，2005年
- 細谷里香：「親（世代）になるための資質形成：中学・高校時代の乳幼児との触れ合い経験歴との関連性」

教育実践学研究 16(2), 23-34, 2015年

小島康生・水野里恵・塚田みちる：「高校生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験実習の効果－赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化－」中京大学 心理研究科・心理学部紀要 第11巻 第1号 15-27, 2011年

岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子：「中・高生の家庭科における『幼児とのふれあい体験』を含む保育学習の効果－幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連－」日本家政学会誌 Vol63 No.4 175-184, 2012年